

奈良プランにおける「なかよし」実践の 成立と展開

—「グループなかよし」に着目して—

板橋 雅 則

はじめに

本稿の目的は、奈良女子高等師範学校附属小学校（以下、附小⁽¹⁾）の奈良プランにおける「なかよし」実践の成立過程を明らかにするとともに、成立後の実践上の展開について解明することである。特に、本稿では、「なかよし」実践のなかの「グループなかよし」に着目し、主に1950年代および1960年代の実践を検討対象とする⁽²⁾。

奈良プランとは、附小主事重松鷹泰のもとで1948（昭和23）年9月に実施開始となった教育計画である。奈良プランは、「しごと」「けいこ」「なかよし」の3つの教育形態によって構成される。本稿で注目する奈良プランの「なかよし」実践では、学級を単位とする「学級なかよし」と、異学年児童によって活動を行う「グループなかよし」とがある。これらの活動内容としては、委員会、学芸発表、清掃、レクリエーションなど、多種多様である。

このように「なかよし」実践は、現代における特別活動の内容に合致するものを数多く含んでいる。また、「なかよし」実践は、学校教育全体を通じた道徳教育の取り組みとしてもとらえることができる。したがって、本稿は、戦後初期におけるこれらの実践史研究として位置づけることができる⁽³⁾。これらに関する先行研究は、学習指導要領の変遷に焦点をあてた通史的な論及にとどま

り、小学校実践レベルにおける子細な検討にまで立ち入っておらず、いまだ実態の解明に至っていない⁽⁴⁾。また、特別活動、道徳教育の各領域内にとどまる研究が多く、これらの研究は、学校教育全体を通じた道徳教育に関する実践史研究としての視点を欠いている。カリキュラム・マネジメントの重要性がさげられる昨今の教育において、「なかよし」実践の検討は、学級のみならず異年齢集団を活動の母体とする教科・領域横断的な道徳教育実践を構築するうえでの有益な示唆を導き出すことにつながると考えられる。

これらのことから、「なかよし」実践の検討は、特別活動・道徳教育の両分野を架橋する実践史研究の事例として意義を有すると考えられる。しかしながら、管見の限りでは、「なかよし」実践の検討を中心に据えた本格的な研究は行われていない状況である。特に、その実践面における検討は、ほとんど行われていないといってよい。附小に関する先行研究は、木下竹次の学習法に関連した戦前の実践を取り上げたものが圧倒的に多く、戦後の実践を取り上げた研究としては奈良プランのなかの「しごと」に着目した教科教育・総合学習に関する研究がわずかにみられる程度である⁽⁵⁾。

以上のような先行研究の状況をふまえ、本稿の研究目的を達成するために、次のような研究方法をとる。まず、戦後直後の附小の実践の検討を行うとともに、奈良プラン全体のなかで「なかよし」実践がどのようなねらいをもち、どのような経緯で実践が形成されていったかを明らかにする。つづいて、「なかよし」実践が成立後にどのように展開していったか、この点を検討する。考察にあたっては、1958（昭和33）年の「道徳の時間」創設に対する附小の反応に着目する。この点に着目するのは次の理由による。小学校の「道徳の時間」においては36の内容項目が示され、これによって一定程度の計画的な学びが可能になった。これに対し、「なかよし」実践は、子どもの「生活」における諸問題の解決をめざす道徳的実践を展開する点に特徴があり、指導上における偶発的な要素を有している。したがって、「道徳の時間」創設に対する附小の反応を明ら

かにすることは、「なかよし」実践の立場や実践上の特質をより一層浮き彫りにすると考えられるのである。

1. 「なかよし」実践の成立

附小において、「なかよし」実践はどのような過程でつくりあげられていったのか、ここでは、「なかよし」実践の成立過程を明らかにする。まず、「なかよし」成立以前にどのような実践があったのかを確認し、つづけて、奈良プラン成立時における「なかよし」実践の基本方針を明らかにする。

(1) 「なかよし」実践前史

戦後初期、附小の教育の再スタートのなかで、教科の学習のみならず、教科外の活動も展開されていた。この活動の様子は、学校史『わが校五十年の教育』のなかで記されている⁽⁶⁾。この記述を手がかりとして、「なかよし」実践前史を確認しておこう。

学校史『わが校五十年の教育』の記述によれば、1946（昭和21）年2月、学校内において、一部の児童の自治的な相談の会が自発的に生まれたという。これは、「談話会」と名付けられて、その後、全校的組織へと発展した⁽⁷⁾。附小における同時期の教育課程に着目してみると、まず、「自由学習時間」が特設され、これが「自由研究日」に発展、さらに「自由研究」へとつながっていった。「自由研究」では、算数、理科、音楽など、12のクラブ組織があり、それぞれのクラブには3年生以上の児童が所属していた。

1948（昭和23）年4月、この活動の転換期を迎える。青少年赤十字活動の精神をこの「自由研究」にとり入れることになり、同年5月には正式に青少年赤十字に加盟登録している。その後、従来の自治的活動である「談話会」を包含して組織化が図られ、「子ども赤十字」と名付けられた。その活動を行う時間と

して、「赤十字の時間」が設置され、1・2年は週2時間、3年以上は週4時間が配当された。このような活動に至った経緯については、次のように述べられている⁽⁸⁾。すなわち、青少年赤十字の目的を取り入れることで校内の自治活動組織を、単に戦前への復活にとどまらないようにするとともに「自由研究」にすじを通して、「清新な独自の自治的活動」にしようと考えたという。

「子ども赤十字」の特徴のひとつとして、異年齢集団による活動を取り入れた点があげられる。この点こそが、その後に成立する「なかよし」実践との共通点なのであった。「子ども赤十字」では、3年生以上の学級を解体して、異年齢のグループをつくり、活動が行われた。グループは、「直接行動的に、学校、社会に奉仕する」A部と、「研究を深化して発表し、学校の全員を楽しませたり啓発したりする」B部の2部に大別された⁽⁹⁾。児童は、希望によっていずれかのグループに所属し、3か月でA部、B部を交代する。また、活動の母体として「子ども赤十字委員会」が設けられた。各グループから1名、各学級から2名の委員が選出され、委員会が構成された。これら委員会のほかに、日々の生活指導をする「週リーダー」を設けて、附小教員の週番リーダーと一体の行動を行うといった活動もあわせて展開していた。これらの活動は、その後に成立する「なかよし」実践の原型となったのであった。

(2) 「なかよし」実践の成立

このような状況下において、附小の教員たちは、奈良プランの策定にとりかかっていった。ここでは、まず、奈良プランの全体像を示し、つづけて「なかよし」の位置づけやねらいなど、この実践の概要を確認していこう⁽¹⁰⁾。

奈良プランとは、附小主事重松鷹泰のもとで1948（昭和23）年9月に実施開始となった教育計画である。同校では、教育目標として「人間として強い人間」が掲げられた。「人間として強い人間」について、次のような説明がなされている⁽¹¹⁾。はじめに、「民主的公民」としては、「まず何よりも、自己に誠実な独立

した人格であることが必要」だという考えが示される。つづいて、「自己に誠実」であるということは、「自分の人間らしい生活をしたという切実な要求を、はつきりと認め、それを主張すること」が原点とされる。ここで示されている「自己に誠実な独立した人格」は、「現代日本の民主的公民に、ぜひ必要なもの」であって、このような人格を有した人物が、「人間として強い人間」ととらえられ、附小では、このような人物の育成がめざされた⁽¹²⁾。

この「人間として強い人間」という教育目標を達成するために、「しごと」「けいこ」「なかよし」の3つの教育形態と各種能力指導系統表が作りあげられた。これらを称して奈良プランとよぶ。本稿で注目している「なかよし」は、奈良プランの3つの教育形態のなかのひとつというわけである。奈良プラン全体とのかかわりのなかで「なかよし」の重要性は、次のように説明されている⁽¹³⁾。

子どもたちの生活は、主として学級を単位として行われていますが、時にはそれをはなれて、全くの個人として、あるいは一つのグループとして、あるいは学校全体として、生活を楽しみ、生活を反省し、あるいは生活を開拓していくような場面が必要です。これは自分たちの属している社会（家庭・学級・学校・地域社会）をはつきりと意識し、また自己というものを、はつきりと確立していく上に、ぜひなくてはならない生活の部面です。

このような考え方によって作りだされた教育形態が「なかよし」であった。「しごと」や「けいこ」の学習は、学級中心で行われることが多いのに対して、「なかよし」の活動は、学級以外の集団で行われることが多い。このような特質をとらえるならば、奈良プラン全体として考えたときに、学級の生活にくわえて、学級以外の集団で生活する場面を設けることが「なかよし」の重要な役割であったといえる。「なかよし」は、前述したすでに発足していた「子ども赤十字」を、総合的な教育計画の一環として位置づけたものである。「子ども赤十

字」から「なかよし」までの流れについて、「これらの経過をみると、他律的な目標で動いていたものが自律化するとともに、自由研究的、個人活動的なものが、研究を生かした奉仕活動的なものに、また協同活動的なものに進化発展していると言えよう」という評価がなされている⁽¹⁴⁾。

それでは、「なかよし」実践には具体的にはどのような活動があったのであろうか、次にこの点を確認していこう⁽¹⁵⁾。

まず、学級を単位にした活動として、「学級なかよし」がある。ここでは、主に、学校生活や学級での生活上の諸問題についての話し合いが行われる。次に、学級以外の集団による活動として、「グループなかよし」がある。この活動では、3年生以上が対象とされ、学級を解体して異年齢グループによって活動が行われる。「グループなかよし」は、A部・B部の2つの組織によって編成され、それぞれの活動が行われる。年度によって編成が見直されるため、その年によって若干の異同があるが、昭和25年度においては、A部として、新聞・美化・園芸・衛生・体育・図書の6グループ、B部には、文芸・音楽・図画・工作・裁縫・理科・算数・習字・ダンス・体育・演劇の11グループがあった。3年生以上の子どもたちは、A部・B部のいずれかに属し、そのなかの1グループに参加する。6カ月間をそのグループで活動し、半年後すなわち10月のはじめからは、A部のグループに属していた子はB部のグループに、B部のグループに属していた子はA部のグループに所属がえをし、また6カ月間その新しいグループで活動をするといった具合で活動が展開されていた⁽¹⁶⁾。

「グループなかよし」についてももう少し詳述していこう。A部・B部の区分について、附小刊行物『正しいしつけ』（秀英出版、1950年）において、次のような説明がなされている⁽¹⁷⁾。これによれば、A部は「学校生活への直接奉仕」、B部は「文化的活動を通じての学校生活への間接奉仕」を主としてねらっているとされる。「奉仕」という語感には「不純なものが入っているから」という理由により、「奉仕」ということばは子どもたちに対しては使っていないと

いう。また、「直接」「間接」ということも子どもたちには示していないという。それは「考え方によってどちらがどちらにもなるから」と理由づけされている。グループへの所属は、子どもたちの自由意思が原則であるが、子どもたちの希望を調べ、これに基づいて教員全員で慎重に検討するといった方法がとられている。ここでは、グループの活発な活動や、個性の伸長の可能性を考慮した編成がめざされる。これらの点は、奈良プラン成立以前の活動である「子ども赤十字」と酷似しているといえる。

「グループなかよし」のメインとなる活動は、火曜および木曜の各 80 分の活動である。火曜・木曜の各 80 分の通常の活動にくわえ、「グループなかよし」の集団は、次に示す 2 つの活動の集団母体ともなっており、この点が特徴的である。すなわち、「朝のなかよし」の清掃活動、「土曜なかよし」の集会活動の 2 つである。「朝のなかよし」では、「グループなかよし」の活動場所を中心に清掃が行われる。また、「土曜なかよし」は、2 年生以上の全校児童が体育館に集まって催しをする活動である。

以上のように、「なかよし」実践は、学級集団を活動の母体とする「学級なかよし」と、異年齢集団を活動の母体とする「グループなかよし」との 2 つに大別できる。学校生活のなかでより広範にわたって活動を展開する「グループなかよし」は、「なかよし」実践の特徴的な取り組みであるといってよい。以下では、「グループなかよし」に焦点化して論述していく。

2. 「なかよし」実践の展開

これまで「なかよし」実践成立までの経緯を明らかにするとともに、この実践の全体像を示してきた。ここでは、1958（昭和 33）年に創設された「道徳の時間」との影響関係にも着目しながら、「なかよし」実践成立後の展開について考察する。

奈良プランにおける「なかよし」実践の成立と展開

「なかよし」実践の検討をはじめのまゝに、主に考察対象となる附小関連文献を確認しておきたい。これを一覧にしたものが次に示す表1である。「なかよし」実践の展開を明らかにするにあたっては、このなかの『正しいしつけ』（秀英出版、1950年）、『わが校五十年の教育』（1962年）、『「なかよし」活動と道徳指導』（明治図書、1964年）が、主な検討対象文献である。

表1 附小関連文献一覧表

刊行年	書名	発行所	出版時の主事・校長
1949（昭24）年	生活カリキュラム構成の方法	六三書院	重松 鷹泰
1949（昭24）年	たしかな教育の方法	秀英出版	重松 鷹泰
1950（昭25）年	正しいしつけ	秀英出版	重松 鷹泰
1956（昭31）年	子どもの解明と学習	蘭書房	浅井 浅一
1958（昭33）年	教科外活動99の相談	明治図書	福島 重一
1958（昭33）年	研究授業99の相談	明治図書	福島 重一
1962（昭37）年	わが校五十年の教育	附小発行	加藤 正英
1964（昭39）年	「なかよし」活動と道徳指導	明治図書	辻田 右左男

*『生活カリキュラム構成の方法』は文部省刊行物である。

*次の2冊は、「教師のための相談選書」というシリーズ本である。『教科外活動99の相談』（教師のための相談選書18）、『研究授業99の相談』（教師のための相談選書21）。

(1) 「なかよし」実践の変容

ここでは、「なかよし」実践成立後にどのような変容がみられたのか、実践上の変容の内実を解明していく。附小関連文献を読み進めていくなかで、次のような結果を得た。すなわち、「学級なかよし」の大きな変容は確認できず、明らかな変容がみられたものは、学級以外の異年齢集団による「グループなかよし」の実践であったということである。「なかよし」実践の変容は、1954（昭和29）年ごろが顕著であり、それは、浅井浅一校長による「集団指導の理論の導入」によってもたらされた。「グループなかよし」の活動に関する変容として、次の

3点が指摘できる。

1点目は、「グループなかよし」の種別を変更している点である⁽¹⁸⁾。グループの種別は、発足当初からの「宿題」であったとされ、特に、A部・B部の区分が問題視されていた。結果として、両部の別を廃して、各グループのなかに、市民的奉仕的活動と文化的教養的活動とを一体的にもたせるかたちで「グループなかよし」の変更がなされた。これによって、各グループとも、奉仕的活動、研究的活動、双方をあわせて行うことになった。また、昭和38年度前期「グループなかよし」では、創設時には存在しなかった「アルバム」、「教具」、などが加わり、16のグループ編成となっている⁽¹⁹⁾。「各教官の個性と希望を生かし、児童の興味と必要に立って編成される」ため、必ずしも毎年同一のものとは限らないのが「グループなかよし」なのであった。これらのことから、「グループなかよし」の種別については、唯一絶対のものとして固定化されることなく、常に検討の対象となっていたことがわかる。

2点目は、「グループなかよし」の参加学年を変更している点である⁽²⁰⁾。当時の附小では、浅井校長のもとで「集団社会の構造と人間関係の力学」の分析解明の研究が重視されていた⁽²¹⁾。発達段階に応じた集団活動がめざされていくなかで、長年にわたっての研究の対象となっていた3年生の取扱いに決着がみられるかたちとなった。3年生は、「グループなかよし」の組織から外され、これの「準備期」の位置づけがあたえられた。これによって、「グループなかよし」は、4年生以上でグループを構成することとなった。

3点目は、「土曜なかよし」の集会形態を変更している点である⁽²²⁾。「土曜なかよし」では、開始当初、学級を母体とした集会活動が行われていた。それが、1955（昭和30）年10月から、これまでの学級中心から、「グループなかよし」による発表を多く取り入れる形式へと変わっている。また、形式の変更にとともに、集会の配列も学級別からグループ別へと変更がなされている。こうして「土曜なかよし」での発表集団という、新たな要素が「グループなかよし」に盛

り込まれたことになった。

以上3点にわたって、「グループなかよし」の実践に関わる変容を指摘してきた。一方で、「学級なかよし」に大きな変容は確認できなかった。この点は、1958（昭和33）年の「道徳の時間」創設に対する附小の反応を考察することによって、より鮮明になる。なぜならば、特定の時間に道徳教育に特化した学習を実施する「道徳の時間」の誕生は、「なかよし」実践の見直しを迫る契機になりえたと考えられるからである。

(2) 「なかよし」実践における理念の継承

これまで「なかよし」実践の変容について、3点指摘した。ここでは、「なかよし」実践のその後の展開の特徴について、「道徳の時間」創設との関連に言及しつつ、検討をすすめていく。

① 「全生活によるしつけ」

奈良プランにおける「なかよし」実践は、特定の時間に道徳教育を行うものではなく、学校教育全体を通じた道徳教育を実現するものであったといえる。学校教育全体を通じた道徳教育の実現は、より具体的にいえば、奈良プランの教育目標としての「人間として強い人間」の形成をめざした「しつけの教育」によって行われるものであった⁽²³⁾。「しつけの教育」は、奈良プランにおける「しごと」「けいこ」「なかよし」の「統合点」に位置づけられる、同校における道徳教育の基本方針といえる。

「しつけの教育」の具体像は、1950（昭和25）年に発行された『正しいしつけ』（秀英出版）のなかで体系的に示されている。ここでいう「しつけ」とは、附小においては、通常とは異なる意味合いでとらえられているため、注意が必要である。「しつけ」という言葉には、他律的な作用としての印象をうけるが、ここでは、そのようにはとらえられていない。

それでは、「しつけ」はどのように定義されているのだろうか。附小においては、「しつけ」という言葉は、次のような意味を包含するものとしてとらえられている⁽²⁴⁾。まず、従来は「他律的な習慣養成」を「しつけ」、「自律的な意志を育成し、自主的な性格をつくること」を「訓育」とよんでいたという見解が示され、つづけて、「『しつけ』は『訓育』の前段階であり、『しつけ』と『訓育』とは他律的と自律的とで性質の反対のものであるという考えが行われていた」という認識が示されている。これに対して、この区別に異を唱え、次のような主張がなされている。すなわち、「自律的とか他律的とかいっても、それは単なる便宜的なものであって本質的な差別ではない」という主張である。このように主張したうえで「従って私たちは『しつけ』即『訓育』という広い意味において、『しつけ』を解釈する」という立場が表明されている。

このような「しつけ」の定義のもと、附小では、「しつけの原則」がつくられた。「しつけの原則」は、次の3つである⁽²⁵⁾。

- 一 子どもの生活の全部面にわたって存在しているそのきっかけを常に生かしていく。言いかえれば、子どもの全生活を通じてしつけていくということである。
- 二 その全生活の場面というものを支配している空気というものを、望ましい性格形成に適合するようしていく。何故ならば、我々はどんなに細心の注意をはらっても、子どもたちの性格のきっかけとなるようなさまざまなもの、ことごとく、意識的に統制していくということは不可能である。その全生活の場面の空気を作っていくということによって、そのきっかけが自然に有効に働くようにしなければならないからである。
- 三 さまざまのきっかけに反応する、子どもたちの自己の在り方を、問題にしていかなければならない。その自己は性格の中心であり、同一の

きっかけに対しても、それを生かしたり、殺したりする要因であるからである。このような、子どもたちの自己を確立させていくという原則を立てた場合には、当然のことであるが、急速にその効果が外面に現われるということは期待出来ない。けれども、その変化は確実なものであるから、あともどりしない「しつけ」を期待することが出来る。

以上の3つが附小における「しつけの原則」である。また、これら3つの「しつけの原則」は、次のように名付けられている。すなわち、「全生活によるしつけ」、「ふんい気によるしつけ」、「自己確立のしつけ」である。

これら3つの原則のなかで、学校教育全体を通した道徳教育という方針と密接な関連を有するものが、「全生活によるしつけ」である。「全生活によるしつけ」については、次のように説明されている⁽²⁶⁾。

全生活を通じて「しつけ」をするということは、これを逆にいえば、「しつけ」のための特別の時間を設けないということになる。何時から何時までは「しつけ」の時間であるとか、何日から何日までは「しつけ」の強調週間であるというようなことはおかしいことである。ただ、自分たちの生活にゆとりを与え、生活を検討し、反省する機会を設けるという意味においてなら、必ずしも排斥する必要はない。しかし、そのようなゆとり、反省の機会は、むしろ不断に用意されるようにするのが賢明であろう。

このように「全生活によるしつけ」を原則とすることは、「しつけ」のための特別の時間を設けないことを意味するものであった。「全生活によるしつけ」では、全生活を通じて一貫した「しつけ」の方針をもつこと、子どもたちの生活のリズムを重んずること、生活に一定のゆとりを与えることが重要視されていた。

また、附小刊行物『正しいしつけ』の巻末には次のような記述があり、特筆に値する。ここでは、「しつけの方法については、微に入り細に入っているが、肝心の、何をしつけるかということが、明らかでないように思うが、どうしてそうなのか」という読者からの想定質問が示され、これに対して次のような回答がなされている⁽²⁷⁾。

望ましい個々の行為を列挙するということは、誰が考えても煩に堪えない。しからばその行為の根源として、正直とか、勤勉とか、責任感とかと、同情とかいう徳目をあげたらどうかといえ、そういう徳目は互に交錯したり、自分自身の中に異なる部分を含んでいたりして、却って曖昧になる。だからむしろもっと根源に辿って、望ましい性格の構造を考えて行こうとしているので、しつけの内容が明確でないように感ぜられたのであろう。

また、「しつけ、訓育の指導計画表を作りたいと思うが、この書物には、そのようなものの雛形がないので残念である。どのようにして作ったらよいか」という想定質問に対しては、「徳目の選定と配列で、事終れりという安易な考え方を避けたい」とも回答している⁽²⁸⁾。これらの回答から、附小の「しつけ」に対して、あるいは、道徳教育全般に対する態度が明確に表明されているといえる。附小においては、「全生活によるしつけ」を重視する姿勢が貫かれており、徳目主義的な考え方は、明確に排除されているのであった。

このように附小において、「全生活によるしつけ」という原則に基づいて「なかよし」実践が展開されるなかにあつて、1958（昭和33）年に「道徳の時間」が創設されたのであった。「道徳の時間」創設とともに、小学校において36の内容項目が示される。これによって、計画的・系統的な道徳教育が展開されていく。

これまで検討してきたように、附小の「しつけ」の考え方は、特定の時間に

道徳教育に特化した活動を展開するものではなかった。「なかよし」実践は、子どもの「生活」における諸問題の解決をめざす道徳的実践を展開する点に特徴があり、指導上における偶発的な要素を多分に有しているものでもある。この点においては、内容項目に従った計画的・系統的な「道徳の時間」の実施とは相容れないところといえる。「道徳の時間」創設後にあたる1964（昭和39）年に附小は『「なかよし」活動と道徳指導』（明治図書）を発行し、このなかで「道徳の時間」に言及している⁽²⁹⁾。「道徳の時間」創設に関して、「昭和33年『学習指導要領』が制定されて、道徳教育の目標と内容が示されたとき、わたしたちは、わたしたちの『しつけ』の考えや指導上の配慮が、その根本的な立場において一致していると解釈したのであった」と述べている。「目標」「内容」の「一致」は認めつつも、その「方法」については言及がなされていない。道徳教育をめぐる「方法」は、明らかに異なる立場なのであった。これについては、同書における次の記述からも垣間見ることができる。

道徳指導は、とかく固苦しく、強制的、抽象的に流れて、生き生きとしたあたたかい血の通わないものになりやすい。それであって、生きた子どもの心底に培うことは、とうていできない。「なかよし」は、具体的な活動であって、子どもたちにも親しみやすい。しかも、それは道徳指導の具体的な実践場面であり得る。そこで、わたしたちは、道徳指導を、この「なかよし」を強化することによって、新しい方向に発展させていきたいと考える。

このように附小では、「道徳の時間」を要とする道徳教育とは違った手法、すなわち「なかよし」の「強化」でもって、道徳教育における「新しい方向」を見出すことがめざされた。このように、「道徳の時間」創設後においても、附小にあっては「全生活によるしつけ」という原則を堅持する姿勢をとったのであった。

② 「なかよし」の「強化」——異年齢集団による道德教育の意義の再確認——

これまで検討してきたように、附小においては、特定の時間に道德教育を行うのではなく、これまでの「なかよし」実践を「強化」することによって、「道德指導」の「新しい方向」が模索された。「なかよし」実践の「強化」のひとつが、異年齢集団による道德教育の意義の強調であった。

「道德の時間」創設と同年にあたる1958（昭和33）年に、附小は『教科外活動99の相談』（明治図書）を発行している。これは、「教科外活動」に関連する99項目の質問に対して、附小の教員が回答するという構成になっている。この回答を読み解くことで、同校における教科外活動、さらには道德教育に関する基本的な考え方を明らかにすることができる。同書では、「教科外活動を組織するのに、いちばん考えなければならない点は何でしょうか」という問いに対する回答のひとつとして、「学校を一丸とした学校単位の組織とすること」が主張され、次のような説明がなされている⁽³⁰⁾。

この活動が、子どもたちに全校的な生活建設の意欲と実践をうながすように、また、学級とちがう集団の中で人間関係技術を習得して、社会人としての資質を一そう高めることができるようにするためには学級を解体して長幼混合の生活形態にするのがいいでしょう。それで、五、六年より更に四年生を加えることが望ましい形といえましょう。平素は学級という社会生活の形態に終始している子どもたちに、それとは異なった組織を与えて、他のちがった子どもと接し学年を超越して協力し、あるいは学級担任以外の指導者に接して相互に認識を深めることがこの活動の意義深いところといえるでしょう。もちろん人間関係の上から知的水準の相違から、この方がかえって多くの問題をはらんで困難点も多いわけですが、その抵抗に教育的意義があり、その克服にこの活動の真意があるといえましょう。単なる運営上の問題から便宜的に学級単位にするという態度は避けるべき

でしょう。多面的接触をはかるように、いろいろな集団を遍歴させることは、この活動のいのちでしょう。

このように述べ、「長幼混合」による集団活動の重要性が強調されている。これまで検討してきたように、附小では、「グループなかよし」の活動を中心としながら、異年齢集団による活動を積極的に取り入れていたのであった。

同校における異年齢集団による活動は、「グループなかよし」の活動だけにはとどまらない。たとえば、毎朝の清掃があげられる⁽³¹⁾。同校では、学級ごとのグループ編成ではなく、「グループなかよし」のメンバーごとに清掃が行われていた。「グループなかよし」による清掃は、それまでの学級単位の清掃を改め、長幼男女混合、異年齢のグループ組織とし、そのグループに関係の深い場所を分担した。毎朝の清掃をグループごとに分担して行うことは、「不知不識の間にグループの構成員を親密にさせ、グループの活動を発展させる基礎となっている」とされ、この点に教育的意義が見いだされ、「なかよし」実践成立当初から重要視されている取り組みなのであった⁽³²⁾。週2回程度の「グループなかよし」の時間のみならず、毎朝の清掃とともに活動することによって日常的に交流を図ることができるのである。さらに、「組織の中で、積極的に参加する経験を深め、グループ相互の結合をはかるとともに、学校全体に対する視野を開き、モラルを高め、学校文化を向上する」目的で実施された集会活動⁽³³⁾、週番活動、などにおいても異年齢集団による活動が取り入れられている⁽³⁴⁾。

このように附小においては、「なかよし」実践を中心として、異年齢集団による活動が積極的に取り入れられている。これに関しては、次のような記述からも異年齢集団による活動を重視する背景を垣間見ることができる。ここでは「社会観の成長」として、「さまざまな社会の中に生活させ、できるだけ多くの社会的体験を得させることが必要である」と述べられている⁽³⁵⁾。さらに、「学級社会や、学級外のいろいろな集団生活の中で、もっともっと社会的問題の解決に、

指導の手を加えなければならないと思う」と表明している⁽³⁶⁾。「全生活によるしつけ」という原則を体現するにあたり、「なかよし」実践は、重要な役割を果たしていたといえるのである。

おわりに

本稿の目的は、附小の奈良プランにおける「なかよし」実践の成立過程を明らかにするとともに、成立後の実践上の展開について解明することであった。「なかよし」実践は、奈良プラン成立以前に存在した「子ども赤十字」の活動を原型とし、その活動を精緻化することによって作られたものであった。「なかよし」実践成立後は、「学級なかよし」において大きな変容がみられなかったのに対して「グループなかよし」では3つの実践上の変容が確認できた。その一方で、同校の「しつけ」の原則のひとつである「全生活によるしつけ」はその後も堅守され、これは「道徳の時間」創設後においても同様であった。附小にあっては、特設された「道徳の時間」を要とする道徳教育とは違った「道徳指導」の「新しい方向」が模索されており、それは「なかよし」の「強化」にその方途を見出していた。「なかよし」実践の成立と展開の検討を通して、次の2点の実践上の工夫が指摘できる。

1点目は、「なかよし」実践成立以降、特に異年齢集団による活動のあり方について追究しつづけていた点である。具体的には「グループなかよし」において、数多くの改善が加えられていた。参加学年、グループ所属期間、グループ種別、などにおいて変更がみられた。「グループなかよし」の展開にあたっては、活動を固定化することなく、子どもたちの状況の分析に基づきながら、変化を加えていったのであった。

2点目は、「グループなかよし」の主となる活動以外に、同一メンバーによって多種多様な活動を同時並行で展開していた点である。毎朝の清掃は日常的な

交流の場として、「土曜なかよし」は発表集団としての非日常的な活動の場として、有効に機能していた。「グループなかよし」での主たる活動に加えて、これらの活動を取り入れることによって、グループ間の良好な人間関係の構築がめざされていた。主たる活動のほかに、同一メンバーでの日常的な交流の場、学内集会発表といった通常とは異なる活動の場を組み込むこれらの工夫は、異年齢集団による活動を実施する際の工夫として示唆に富む。

本稿は、主に公刊された文献の検討に基づいている。校内史料の発掘、当時の実践の関係者への聞き取り調査を行うことによる「なかよし」実践の内実のさらなる解明を、今後の課題としたい。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 JP20K13883 の助成を受けたものである。

註

- (1) 戦後の校名の変遷は、次の通りである。1947（昭和22）年4月、これまでの奈良女子高等師範学校附属国民学校から、奈良女子高等師範学校附属小学校へと変更になる。その後、1949（昭和24）年5月、奈良女子大学・奈良女子高等師範学校附属小学校に校名変更、1952（昭和27）年4月、奈良女子大学文学部附属小学校に校名変更、2004（平成16）年4月、国立大学法人奈良女子大学附属小学校に校名を変更し、現在に至っている。校名の変遷については次に示す同校ホームページを参照した。<https://www.nara-wu.ac.jp/fusyo/gakkosyokai/rekishi.html>（2020.11.10 最終閲覧）
- (2) 当時の文献・史料の引用にあたっては、旧字体の漢字をすべて新字体に直し、適宜、現代仮名遣いに変更して表記した。
- (3) 特別活動の実践史研究としての意義は、次の指摘からも認められる。附小の記念誌によれば、「なお一般には、文部省の示した自由研究、教科外教育、特別教育活動という動きが見られたが、それらに対しても、わが校の活動は発足が早く、一貫性、継続性があるために参考資料を提供することができた」という（奈良女子大学文学部附属小学校『わが校五十年の教育』、1962年、294頁）。また、明治図書から刊行されたシリーズ本、『教師のための相談選書』において、附小の教員が、1958（昭和33）年に『教科外活動99の相談』を担当し、刊行している。これらのことから、同時代における「教科外活動」の推進校としての位置を

奈良プランにおける「なかよし」実践の成立と展開

あたえられていたと推測することができるのである。

- (4) 特別活動の歴史に関する先行研究として、次のものがあげられる。関川悦雄「特別活動の成立の歩み」日本大学文理学部人文科学研究所編『研究紀要』第46巻、1993年、77-91頁。志村明善「特別活動の本質Ⅰ」青山学院大学教育学会編『教育研究』第45号、2001年、101-112頁。志村明善「特別活動の本質Ⅱ」青山学院大学教育学会編『教育研究』第46号、2002年、93-109頁。山口満「特別活動の歴史の変遷」山口満・安井一郎編著『改訂新版 特別活動と人間形成』学文社、2010年、26-48頁。また、道徳教育の歴史に関する先行研究として、次のものがあげられる。押谷由夫『「道徳の時間」成立過程に関する研究』東洋館出版社、2001年。江島顕一『日本道徳教育の歴史』ミネルヴァ書房、2016年。
- (5) たとえば、次のような先行研究があげられる。長岡文雄『合科教育の開拓』黎明書房、1978年。田中耕治『「総合学習」の可能性を問う』ミネルヴァ書房、1999年。筆者も、これまでに次の論文を発表し、奈良プランにおける「総合学習」と「教科の学習」の関連性に着目して実践の試行錯誤の実態を明らかにした。拙稿「戦後における総合学習に関する実践史的考察——「奈良プラン」を事例として——」教育実践学会編『教育実践学研究』第23号、2020年、55-65頁。
- (6) 前掲『わが校五十年の教育』、291-293頁。
- (7) 戦時中には、「特設修練」という名称の活動が行われていた。これは、高学年児童を対象とした活動であり、「戦技」、「科学」、「生産」の3つの活動があった。これらの活動は、「子どもたちの団体行動としての意義があり、後の『なかよし』活動のよき芽生となるものをはらんでいた」という（同上、291頁）。また、「談話会」は、「学級だけでは解決のできないだじな問題がある」とし、「こうした問題を話し合って、学校をよくする会を開かしてほしい」という6年生の子どもの申し出によって誕生したものであった（奈良女子大学文学部附属小学校学習研究会『「なかよし」活動と道徳指導』明治図書、1964年、203-204頁）。
- (8) 前掲『「なかよし」活動と道徳指導』、205-206頁。
- (9) 前掲『わが校五十年の教育』、292-293頁。
- (10) 「なかよし」実践の概要を示すにあたっては、次に示す文献を参照した。奈良女子大学・奈良女子高等師範学校附属小学校学習研究会『正しいしつけ』秀英出版、1950年、152-162頁。なお、奈良プラン全体の成立過程については次の論文を参照されたい。前掲「戦後における総合学習に関する実践史的考察——「奈良プラン」を事例として——」56-58頁。
- (11) 奈良女子高等師範学校附属小学校学習研究会『たしかな教育の方法』秀英出版、1949年、3-4頁。
- (12) 奈良プラン開始直後の教育目標「人間として強い人間」は、やや抽象的な表現

奈良プランにおける「なかよし」実践の成立と展開

にとどまり、具体像を欠いたものであった。その後、「人間として強い人間」を育てるための「具体的内容」として、「開拓創造の精神」、「真実追求の態度」、「友愛協同の実践力」が設定されている（前掲『「なかよし」活動と道徳指導』、11頁）。

- (13) 前掲『たしかな教育の方法』、33頁。
- (14) 前掲『わが校五十年の教育』、293頁。
- (15) 同上、293-298頁。
- (16) 1グループへの所属期間については、1カ月半、3カ月、など、いろいろと試行錯誤を繰り返していた。この結果、6カ月となっている。
- (17) 前掲『正しいしつけ』、152-153頁。
- (18) 前掲『「なかよし」活動と道徳指導』、215頁。
- (19) 同上、218-223頁。
- (20) 同上、216頁。
- (21) 奈良女子大学文学部附属小学校学習研究会『子どもの解明と学習』蘭書房、1956年、はしがき2頁。
- (22) これに関連して、附小刊行物の『子どもの解明と学習』、268-270頁において、「土曜なかよし運営の発展的移行」と題した図表が掲載されている。これを手がかりとして、「土曜なかよし」変容の内実を確認することができる。昭和30年度において、抜本的な見直しがなされていることがわかる。
- (23) 前掲『「なかよし」活動と道徳指導』、238-239頁。
- (24) 前掲『正しいしつけ』、4-5頁。
- (25) 同上、8-9頁。
- (26) 同上、14頁。
- (27) 同上、279頁。
- (28) 同上、280-281頁。
- (29) 前掲『「なかよし」活動と道徳指導』、242頁。
- (30) 奈良女子大学文学部附属小学校学習研究会『教科外教育99の相談』明治図書、1958年、25-26頁。
- (31) 前掲『「なかよし」活動と道徳指導』、211-212頁。
- (32) 前掲『正しいしつけ』、156頁。
- (33) 前掲『「なかよし」活動と道徳指導』、223頁。
- (34) 前掲『教科外教育99の相談』、77-78頁。
- (35) 前掲『子どもの解明と学習』、76頁。
- (36) 同上、80頁。